

# 都市と森をつなぐ「森と市庭」／ 奥多摩

東京都は日本経済の中心である一方、面積の実に3分の1以上が森林である。株式会社東京・森と市庭（以下、森と市庭）は「都市と森をつなげる」ことを理念に掲げ、東京都西多摩郡奥多摩町を拠点に事業を展開している。東京の森にこだわる理由を同社営業部長 菅原和利氏に聞いた。

## 東京の森を使う、触れる

森と市庭は、林業専門のコンサルティング会社を中心とした複数社と森林所有者らの共同出資により2013年に設立された。事業の柱は大きくふたつあり、ひとつは、奥多摩で生産された木材を使用した都内オフィスの内装や住宅リノベーションのプロデュースである。これまでに都内の投資会社やNPO法人のオフィス、衆議院議員会館内の会議室など様々な場所に導入されている。東京のオフィスには東京の木材を使うというストーリー性が喜ばれることに加えて、ヒノキには気分を高揚させる効果があるのでプレゼンテーションの場に有用であることや、身体をリフレッシュさせる作用を持つスギは休憩スペースに適しているといった、目に見えない効用や木材と人との関係性を伝えることが人気につながっている。

もうひとつの柱は、企業研修の受け入れやツアーといった体験の提供である。体験用に案内している社有林の中には、手入れが行き届いてい



林道をはさみ左側は暗く荒廃。右側の手入れされた森は、光が差し下草や土中の生物が育ちやすい。

る森とそうでない森、その中間の森を一目で見ることができるところがあり、森の明るさや下草の植生の違いと林業との関係性を知ることができる。冷たい沢に足を入れたり、ざらざらした木に触ってみたりすることで、人間本来の五感が磨かれると参加者にも好評だ。「東京に住み、東京で働く人にこそ自分の価値観を磨くためや自分自身を癒すために奥多摩を訪れてほしい」と菅原氏は語る。

## 東京でつながりを見直す価値

森と市庭が目指しているのは、地域産材の生産と利用を通じて、都内にある都市と森が真の豊かさを共有することだ。林業が盛んだった時代のよく手入れされた美しい森と美しい江戸の街並み、そして現代の鬱蒼と荒廃した森と無機質な東京の町並み。この2つを比べて菅原氏は「森と都市の風景は同期している」と表

現する。高度成長期の木材輸入の自由化以降、衰退産業として活気を失っていた林業を再び盛り上げることができれば、モノづくりに込めた職人の思いや、商品の温もりは都市に住む人々の生活を潤し、日々の生活がより持続的で豊かになっていく。安価な外国産材を選ぶという都市側の消費者の都合で森は荒れていったが、今度は逆に、森の側である生産者が商品を提供することで都市を変えていく。これは新しい取組であり、大都市である東京で挑戦することの意味は大きい。

最近、社有林の奥の沢で、絶滅が危惧される生物が見つかったという。それはこの地域の環境がまだ豊かであることを示す証拠だが、これからもその環境を守り続けるために、森と向き合う都市をつくることもまた重要である。

【聞き手：つな環編集部】